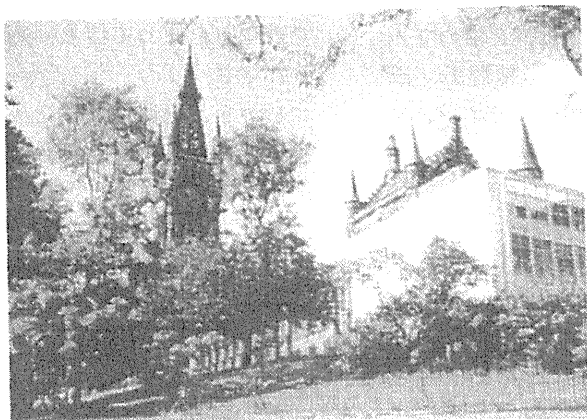


読 覧 ニ ュ ー ス

84号

1999.1



感謝祭に思うこと

平井清子

11月の第4木曜日はアメリカでは感謝祭(Thanksgiving Day)です。新世界を求めてメイフラワー号でやって来た清教徒達が、厳しい自然と戦いながらも、先住民のインディアンにトウモロコシやかぼちゃの作り方を教えてもらい、実りの秋を迎えたことを、神に感謝したのが始まりでした。最初の感謝祭は1621年、55人の清教徒と約90人のインディアン(Native American)が、北アメリカにいる野生の七面鳥をメインコースにして共に祝いました。

G. ワシントンの頃から、休日として定着しつつあった感謝祭は、1863年にA. リンカーンが公式に国民の休日として、11月の最終木曜日に決めました。それが、11月の第4木曜日に変更されたのは、1939年、F. D. ルーズベルトによってです。大恐慌後、まだまだ景気回復がままならない世の中で、クリスマスまでの買い物シーズンを、より長くする趣旨で行われたのです。

現在では、遠方に住んでいる家族が両親のもとを訪ねたり、友人が集まったり、親しい者が再会し、伝統的な感謝祭の料理を囲みます。オープンでじっくり焼いた七面鳥。そのお腹には、パンと各種のスパイスと木の実でつくられた、詰め物が入っています。それに添えられる、グレービーソースとクランベリージャム。バターと砂糖で煮たヤム(日本でいうサツマイモの類)、そして豆料理が伝統的な感謝祭のメニューです。デザートはかぼちゃで作るパンプキンパイやスクワッシュパイに、生クリームやアイスクリームが添えられます。

子供達は感謝祭を迎える2、3週間前から、幼稚園や小学校で最初の感謝祭について教えられます。そして、インディアンの羽飾

りやピルグリムの帽子などを、鳥の羽そして紙や布を使って作り、感謝祭の用意をするのです。

しかし、先住民のインディアンと移民の清教徒達が、仲良く手を取り合って迎えた最初の感謝祭を思うとき、私は、現代のアメリカ人の中にも、それから後の変化を、つまり、インディアンの土地を奪い、征服していった西部開拓の残酷な戦いの歴史を回顧し、胸に痛みを感じている多くの人を見ることができます。アメリカで数年を過ごした私でも、それに気づくにはやはり時間がかかりました。

プリマスに上陸したメイフラワー号の乗員102名のうち、最初の冬に半数以上が飢えと寒さ、そして病気のために亡くなりました。近くに住む友好的なインディアンの助けがなくては、その後の彼らの歴史はなかったと言えるでしょう。現在、アメリカは世界最大の農産物輸出国ですが、その農作物の7分の4はインディアンに教えられたものなのです。ところが、ワシントン時代に力をつけてきた白人達は、最初にとった、植民地時代の制度を参考にした先住民インディアンとの共存を目的とする基本方針を、大きく翻し始めました。多くのインディアンの首長達が、大統領に面会を求め、白人との平和共存を訴えたにもかかわらず、それから後、白人達は交わされた協定を全て破り、暴虐のかぎり尽くし、西部全域でインディアンが抵抗できなくなるまで虐殺し、全滅させていきます。1890年、サウス・ダコタでのスー族350人の虐殺を最後に、全米のインディアンによる組織的抵抗のすべてが終わります。それは同時に、自然と一体化した美しいインディアン文明が永遠

に消えたときでもありました。生き残ったインディアンは荒野や山岳に指定された、リザベーション（インディアンだけの居住地）の中で住むことを強いられました。そして、市民権が与えられるのは遙か後の1924年であり、投票権が与えられたのは1948年だったのです。

1960年代になって、アメリカで起こった、マイノリティ集団の権利獲得運動の始まりとして、インディアンが“レッド・パワー”のスローガンを挙げて立ち上がりました。インディアンの権利を回復しようとする運動はさらに高まり、『全インディアン連合』も結成されました。この頃から、“American Indian”ではなく、“Indian American”または、“Native American”と表現されるようになり、彼らは『アメリカ人』に変わったのも象徴的でしょう。そして、ボストン美術館の正面玄関に、太陽を仰ぐインディアンの像が建てられ、ワシントンやニューヨークに、インディアンの文化を称えた歴史博物館が建設されました。更に、“Native American”の文明や歴史の研究にもようやく関心を持

たれ、多くの資料が世に出され始めるなど、ここかしこにNative Americanへの回顧と免罪の動きが始まります。しかし、一度失ったものは、二度と返っては来ないのです。

今、遠く離れた日本で、アメリカで過ごした七回の感謝祭の夕べを振り返り、息子を通して知り合った友人のことばを思い出します。「私の曾祖父はチェロキー（インディアンの有名な部族の一つ）なの。インディアンとして生きるより、白人の中に同化することを選んだの。私はそんな人達を沢山知っているわ。でも時々不思議に思うのは、私自身のなかにも、そして息子のなかにもチェロキーの血を強く感じることもあるのよ。それが私達のルーツなのね」。

（英語）



歴史を変えた大学

大 貫 信

ロンドンから特急で5時間のスコットランドの西方グラスゴーはかつて北の山岳地帯に広がる綿羊の製品集積港として栄え産業革命を生み出した。写真の白い一角が1765年改良型蒸気機関を発明したワットの記念館である。当時グラスゴー大学に器械製造請け負い人として作業場を置いてもらい生活していた。生産の自動機械化の概念が世界に波及し産業・商業・金融・政治・文化・芸術を変えた。結果として今はすすけた古い建築物のあいだにむなしいばかりの近代的ビルが並ぶ街である。18-20世紀は大学から発明・発見があいついだ、社会を変えたのは「概念の創造」である。

1920年から40年代にかけてさまざまな計算機が発明され、やがてプログラム内蔵型デジタルコンピュータになる。その第一号はマンチェスター大学でつくられた（写真中段）。デジタルコンピュータを使って1979年に発明された人体の断層写真装置（CTスキャン）はやがて脳の活動の様子が見えるマシンになった。脳の中が見えるマシンが200年後の社会にどうつながるか？脳産業の競争はあるマシンを生む。ヘッドにつけた小さなデバイスが脳の聴覚領野や視覚領野に直接刺激を与え、遠隔地からの電波はそこの景色があたかも眼前にあるがごとく“見える”作用をもたらし、視聴覚障害はなくなっている。すべての情報は契約さえすれば四六時中飛び交う情報電波を受信するヘッドデバイスから得られる。ヒト以外の動物のヘッドにつければ彼らと対話できる。

この情報通信革命は教育、文化だけでなく民衆の意識変化をもたらす。国民から税を徴収し、政治機構を通して配布するという行政まかせは少なくなり、地域の任意集会（ビレッジといわれる）が企画と財務調達による設計立案をし、ノウハウはインターネットでただちに得られ発注する。従って利権的政党政治はなくなるというような変化である。同じメカニズムで教育機関は広域ビレッジになる。1953年ケンブリッジで発見されたDNA2重らせん構造は一大潮流となったが、脳の遺伝子の操作もスケジュールに上り社会構造は一大変化をする。

こうした脳をめぐる産業界の動きとは別に、かつて蒸気機関開発競争が大学の深奥で熱力学そしてエントロピーの発見を生んだように、脳を見るという所作は「創造理論」を生むだろう。「異質のものの結合で生成する新しい情報、その質を定義できる概念」から派生する学問は200年後に宇宙を含めたグローバル空間の中ですべての物が連動し、そこでヒトが生きて行く形の“環境情報マシン”の開発、従ってそうした社会という点につながる。当面「創造理論」のキーワードはストレス回路、オピオイドホルモン回路、前脳の論理カラムなどの3大回路であるが、50年後には“概念の発見”があつて200年後への分岐が訪れるのではないかと思う。概念の創造場所としての大学のありようが問われている。

(情報科学)

閲覧ニュース84号

1999. 1発行

北里大学教養図書館

〒228-8555 相模原市北里1-15-1

発行責任者 坂入 清

電話 (042) 778-8005